

バスケットボールに関するウェブニュースの日米語対照研究

異文化コミュニケーションゼミナール 1214099 立川弘大

1. 研究動機・目的

本研究の目的は、日本語と米語のウェブニュースにおけるバスケットボールの描写の相違点を明らかにしていくことであった。具体的には、日本語と米語においてどのような特徴や傾向があらわれるのかを観察した。そして、その特徴や傾向はどのような背景から来たものかといったところまで追求したいと考えた。本研究が東京オリンピック開催後もバスケットを含む他の競技の発展に貢献できることを願って、論じることとした。

2. 研究方法

分析資料には米語と日本語のウェブニュースを用いた。米語の分析対象は、FOX Sports.com、日本語の分析対象は、NBA.com モバイルとした。これらのサイトから NBA PLAYOFF 2017 の 50 試合を無作為に選び、それらの試合結果に関するニュースの Headline とニュースにおいて言及されている内容と頻度について比較した。

Headline については、まず「結果のみの記述」と「それ以外」の二つに分類した。次に「それ以外」の項目を「勝ったチームに関する記述」と「負けたチームに関する記述」に分けて分析した。

次に、ニュースにおいて言及されている内容についてだが、まず「コメント」、「スタッツ」、「プレーについての記述」、「記録についての記述」の 4 つの項目に分類した。さらに、全体の記事における頻度を分析し、その頻度から米語と日本語のニュースの内容の相違点を分析した。次に 4 つの項目ごとに米語と日本語の表現、描写の相違点を観察し、特徴として現れた記述パターンや差違の顕著な記述パターンについてさらに実例を取り挙げて考察した。

3. 主な結果と考察

本研究の分析結果から、日本語と米語のウェブニュースにおいては、著しい差違は観察されなかった。また、記事によっては日本語の記事と米語の記事の内容がほとんど同じという記事も観察された。このことから、日本語の記事の分析対象である NBA.COM モバイルは米語の記事の分析対象である FOX Sports.com を翻訳し、要約したものではないかと考えられる。日本では NBA の人気はあまり高くなく、NBA の試合結果などの情報を米語のウェブニュースから得たことによってこのような結果になってしまったと推測された。

Headline については、「選手についての記述」の割合は日本の記事が 68% であるのに対し、米語の記事は 81% という結果になっており、米国のほうがより個人の結果を重視していることが観察された。

記事の中で言及している頻度の割合を比較してみると、「コメント」の言及頻度が日本の記事は19%であるのに対して、米語の記事では29%であり、米語のほうが「コメント」について言及している頻度の割合が高いということが観察された。Headlineの考察でも記述したように、米国は個人主義を尊ぶ国であり、自分の考えや気持ちを表現することが重要視されている。そのため、その時の考えや心理状態を表す「コメント」は米国にとってとても重要であり、その結果言及頻度の割合が日本と比べると大きくなったと思われる。

記録についての言及頻度の割合においても、日本語の記事の割合が「個人の記録」の割合が61%であるのに対し、米語の記事が74%となっており、この項目でも個人主義の考えである米国のほうが割合が高くなったと考えられる。

このように、米語と日本語のバスケットボールに関するウェブニュースにおける差は、個人主義の国である米国と集団主義の国である日本の差からきているものと解釈される。

4. 結論

本研究の目的は、米語と日本語のウェブニュースにおけるバスケットボール描写について分析を行い、相違点を明らかにし、それらの相違点はどのような背景から来たものかについて追及することであった。考察で示したように、本研究のデータ分析より、米語の記事は日本語の記事と比べ個人についての描写が多くされており、これは米国のバスケットボールに関する関心が日本と違い、個人の成績を重要視するという個人主義的な考え方によるものであるという特徴が観察された。最終的な結論に至るためにはデータ量は少ない。しかしながら、本研究において米語と日本語でここまで差が生じることを示すことができたことは意義があると思われる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

私にとって大学での4年間の生活で一番印象に残っていることは、コロラド大学への1ヶ月間の留学である。私は大学卒業後、米国に留学したいと考え、異文化コミュニケーションゼミに入ったのだが、その時は米国への留学は漠然としたものであり、英語というのは米国の大学に入学するために必要な学習としか考えていなかった。しかし、大学3年の夏休みに須藤教授に勧められたコロラド大学への留学で、様々な国の人たちと出会い、異文化コミュニケーションや異文化理解などの必要性や楽しさを理解することができ、英語を学習する本当の意味などを知ることができた。それ以降、英語を学ぶことや、米国の文化などの異文化を学ぶことは私にとってとても楽しいものとなった。コロラド大学への留学を強く勧めてくださった須藤教授には、心からの感謝の気持ちでいっぱいである。

卒論が終わり残りの大学生活では、自分の進路を決定させることに集中していきたい。また、進路が決まった後も自分の夢に向かって勉強を続けていきたいと思っている。“Play hard, study hard”をモットーにこれからも頑張っていきたい。